

Thomas Swynnerton 序説

キーワード:トマス・スウィナトン、REX, 履歴

山田 幹郎

1999年、トマス・スウィナトンの『聖書の転義法とことばのあや』が初めて出版され、その後、出版社は他社へ移り、2004年、リプリント版が出た。¹

ロンドンの公立記録保管所 Public Record Office に長い間お蔵入りしていた唯一の写本が元のスペリングのまま編纂された『宗教改革のレトリック』(*A Reformation Rhetoric : Thomas Swynnerton's The Tropes and Figures of Scripture*, 以下、REXと略記する)は、編者レックスRex (1961年生まれ)による227箇所脚注付きIntroduction 90頁、241箇所脚注付き本文94頁、聖書の引用と固有名詞との索引等を計190頁にぎっしりと収録した画期的なすばらしい成果である。²

スウィナトンの略歴と著作については、ジョン・ベイル John Bale の『英国のより注目すべき、より重大な著作目録』が最善かつ唯一の権威書とされる。レックスは、ベイルに依拠しながら、16世紀前半の公私の文書や書簡、諸著作、および20世紀の関係する研究書を渉猟し、スウィナトンの人生について多くの具体的な事実を発見した。例えば、1526年[25年10月-26年5月入学者57名中42人目に]、スウィナトン(‘Thomas Synnortonus Anglus’は彼の姓名と国籍の最初の記録)は、ルッターとメランヒトン Phillip Melanchthon (1497-1580)のウィッテンベルク大学へ英国人として史上2人目か3人目に入学したことや、1531年7月20日、ロンドンの裕福な商人アレキサンダー・メリング Alexander Meryng が同市のシェリフ裁判所 London Sheriffs’ Court へ下女エレノア・ウェイクフィールド Elyanour Wakeffylde を略奪し品物を強奪し、1ヶ月間その弁償に応じていないとして損害賠償を訴えたのに対し、スウィナトン本人と推定される聖職者(‘Thomas Swenerton Clerk’)は、管轄を異にする大法官裁判所 Court of Chancery の大法官トマス・モア (1529年10月25日-32年5月16日在任)へ、エレノアとは同期間中ヨーク州の有力者で彼女の叔父ウィリアム・ウェイクフィールド(‘William Wakffylde dwellying yn the Counte of yeork’)宅に滞在していたとの申し立てをしたことである(REX, pp.7-11)。

ここでは、スウィナトンの転義解釈論に入る前に、REXとレックスの論文とに依拠しながら、彼の履歴のごく一部について若干のコメントをしたいと思う。

さて、ベイルは以下のように述べている。

Thomas Swynnerton a teneris annis bonarum artium & literarum studiosus, ac sacrificulus, publicas Anglorum academias cum fructu percelebrauit. Qui Mori Cancellarii tempore, inter primos Euangelii lucem amplectens, eorum Papistarum horrore territus, qui Christi professores Sauli instar in custodiam tradebant, permutato nomine, Ioannem Robarts se dici

simulabat. Immaculatam Domini legem multis in locis ille docebat, Gippesuici in Sudouolgia praecipue, & in Cantia Sandowici. Interim etiam scripsit,

De Papicolarum susurris, Lib. I.

De Pontificibus schismaticis, Lib. I. Consideras chare lector, tot esse.

De tropis scripturarum, Lib. I.

Bennonem quoque transtulit de uita Hildebrandi, et alia plura fecit. Anno Christi 1554. obiit exul, Emdonae in Frisia sepultus. (quot. REX, p.6.)

(トマス・スウィナトンは、幼少の頃から善き学科と諸言語の勉学に励み、カトリックの聖職者となり、英国の公立学校の成果を上げさせくまなく有名にした。モアが大法官の時、福音の光りを抱擁しその第一級の人物になったので、かのローマ法王礼賛者たちの脅迫を恐れた。キリスト信仰の告白者たちはサウロのように彼を拘留しようとしたが、彼は名前をすべて変え、自分はジョン・ロバーツだと名乗って詐った。主の汚れなき法をかの人には多数の地で、特にサフォークのイプスウィッチ、およびケントのサンドウィッチで、率先して教えた。その間、執筆さえした。

『カトリック信徒たちのつづやきについて』、 1巻。

『教会分離の罪を犯すローマの司教たちについて』、1巻。親しい読者よ、この書には多くのことが書かれていると考えよ。

『聖書の転義法について』、 1巻。

ベノンの『ヒルデブランドの生涯について』も翻訳、その他さらに多くのことをした。

西暦 1554 年、亡命者として死亡、フリースラントのエムデンに埋葬された。³⁾

1. 氏名

Thomas Swynnerton の名である Thomas は、結局、12 使徒の一人で、証拠を見るまでキリストの復活を信じなかった例の ‘doubting Thomas’ [← to tally] に由来しよう。

姓は、ウィッテンベルク大学の登録簿の ‘Synnortonus’ によれば、英語では ‘Synnorton’ か ‘Synnerton’ になろう。一種の変形として扱うこともできるが、なぜ w 音が消えたのかは、やはり、不明とされなければならない。その語源は、with + north enclosure、あるいは、sinner + enclosure となろう。後者の方とすれば、本人による意識的なものが感じられる。

ODNB では ‘Swynnerton [Swinnerton]’ とされ、標記の 1 字が違うものをカッコに入れている。⁴⁾ 日本語ではいずれもスウィナトンとなり、紛らわしくないが、i 綴りは、多分、ベイル、および STC とそれに基づく University Microfilms (Ann Arbor : Michigan) を根拠に尊重して加えられたものであろう。語源は、a person concerned with swins or sowens + enclosure と考えられる。

語頭は 2 重母音の swine (cf. L. sus) を連想させる。スウィナトンは諷諭 allegory の例として、‘Cast no precieuse stones (sai the Christ) before hogges...’ [Mat.7:6] を挙げ、‘apon suche people

as haue no mynde but taccomplishe their bestly lustes and appetites, and to wallowe them selves styll, in the filthenesse of their synne. And maye therefore of good congruence be compared to swyne.’と述べている (REX, p.161)。hogs をわざわざ swine へ変えた所には、ウィリアム・ティンダル William Tyndale を ‘immediate source’ と考えるレックス説 (REX, p.161 & nn.23, 24) にスウィナトン自身の思いが複雑にからんでいる面が表れたのではないかと筆者は解釈する。

y 綴りはテキストの表題紙に加えて、献辞の最初と最後に見られる (REX, pp.97, 100)。さらに、STC 23558 とマイクロフィルム (Reel 1222) に収録されている後世の John Swynnerton, *A Christian Love-Letter : Sent to a Gentlewoman, Mis-Styled a Catholic, to Labour Her Conversion to the True Catholic Faith of Christ Jesus* との同姓や反ローマ教皇的な内容の類似性が系図や宗派の点であくまで偶然の一致なのかどうかの疑念を生むため、今後の興味深い検討課題である。

スウィナトンの偽名もしくは筆名は、ベイルも指摘した重要なことで、‘Iohan Robertes’ (A2) として『教会分離の罪を犯すローマの司教たちの寄せ集め』(*A Mustre of Scismatyke Bysshoppes of Rome*、ベイルの『教会分離の罪を犯すローマの司教たちについて』の原題。以下、書名は MSBR とする) に見られる⁵。ヨハンという名の語源は、やはり、12 使徒の中心の一人の語源 (Yahweh is gracious) に由来しよう。Robertes は fame + bright + son of を語源としている。『すみでぶつぶつ言うカトリック信徒たちへの小反論』(*A litel treatise ageynste the mutteryng of some papistis in corners*、ベイルの『カトリック信徒たちのつぶやきについて』の原題。以下、書名は LT とする。) の表題紙の欄外上には筆跡を異にする Robert. が走り書きされているが (語尾の s は t の横線右端がやや下へ曲がっている所に暗示か)、その表題紙にも本文のどこにも著者名は出てこない。しかし、その反ローマ教皇賛美者としての内容や表現とベイルの証言からスウィナトンがその匿名作家だと断定してよいであろう。LT と MSBR の印刷者が共に Cum privilegio としてトマス・バースレット Thomas Berth[e]let (1520-55) であることもその断定に資するのかもしれない。

REX にあつては、既述のように、本文の表題紙からトマスは消えたが、二つの姓は明記されている。そこには、厳格なローマ・カトリック教徒モアの配下にあつて戦々恐々の緊張した毎日を送っていたスウィナトンが、ヘンリー8世の名代で新時代の最有力者トマス・クロムウェルの庇護を得たいと願う時点に至り、福音を英国民に公表する好機到来を逃さず、公私にわたって解放感と自信を覚えて執筆している光景を偲ばせるものがあるが、出版に至らなかった。献辞のクロムウェルの肩書が示すように、彼は 1536 年 7 月 2 日王璽保管官 [‘keper of the previe seale of oure soueraigne lorde the kinge’]、同月 9 日ナイト爵 [‘Sir Thomas Crumwell knyght, Lord Crumwell’, REX, p. 97]、同月 18 日国王の暫定から終身の名代となっているからである (彼がエセックス伯爵になるのは後の 1540 年 4 月 18 日)。

スウィナトンの場合、REX (pp.15-21) は彼の姓名の標記が著作を別にして 1536 年以降 1 つであつたり、複数であることを示している。

- (1) 1536 年 5 月 5 日、Sir Swynnerton: John Longland の Thomas Cromwell 宛の書簡。
- (2) n.d. [1536 年]、John Swynnerton, priest of Rye: 訴状。

- (3) 1537年10月3日、Thomas Robertes: Norwich Record Office, Act Books 5. 1537年9月の視察において彼は Colchester で妻帯しながら聖餐式を行っていると告発される。
- (4) 1537年12月16日、Thomas Robertes pryst nowe Curatte of the same cherch of saynt Mary Elmys : Ipswich Record Office, Archdeaconry of Suffolk Probate Registers 12. 聖メアリ・エルムズ教区のアン・ライト Anne Wright は彼に銀のスプーン1本を遺贈する。
- (5) n.d., syr Thomas Swynnerton otherwise called Robertes parrishe preest of sainte mery elmes in Ippeswiche: Prerogative Court of Canterbury Probate Registers, Dyngeley. 聖クレメンツ St. Clement's 教区の商人トマス・カトラー Thomas Cutler の遺言。
- (6) 1538年10月5日、Thomas Roberdes [as curate]: 聖メアリ・エルムズ教会聖職者 'clerk' フィリップ・ピカレル Philip Pyckerell の遺言。
- (7) 1541年10月2日、Thomas Swynerton otherwise Robertis : Ipswich Record Office, Archdeaconry of Suffolk Probate Registers. 聖マーガレット教区のロバート・スピリング Robert Spyllyng の遺言。
- (8) n.d., Thomas Swynnerton MA : Cranmer's Register. カンタベリー大執事エドモンド・クランマー Edmund Cranmer は彼をサンドウィッチの聖クレメンツ教会助任司祭 Vicar に任命。

上記(1)から(8)のうち、(2)の John が Thomas のこととしてよい根拠は、訴状が国王至上権を説教する特別許可を受けた者たち(トマス・スウィナトンが勅許を受けた4人のうちの1人)を相手にして彼らの教義上の間違いを指摘していることである。その他の Thomas Swynnerton と(Thomas) Robertes, -bertis の標記も同一人を越えるものではない。いずれにしろ、両名標記はスウィナトンの特色である。

2. 出生時と出生地

スウィナトンがいつ英国のどこに生まれたのかということは不明であり、今後の検討課題である。ベイルに加え、イングランドの地名が上記(1)から(8)、および LT と MSBR に出てくるが、それらと出生地との関係は全く不明である。

3. 学歴

スウィナトンが7歳で堅信礼 confirmation を受け、また、入学するのが通例とされる英国の文法学校、さらに、大学へ入学した事を示す記録は発見されていない。ウィッテンベルク大学入学の登録はあるが、いつそこを学士として卒業したのか、さらに修士として修了したのかは不明とされる。彼は幼少の頃から勉学に励んだとベイルにあるが、ラテン語の tener や英語の tender も日本語同様

にあいまいで、融通の利く言葉である。OED, *adj.* A.4. は、‘Having the weakness and delicacy of youth; not strengthened by age or experience ; youthful, immature. Chiefly in phrases tender age, years (also †tender of age).’と定義している (OLD も参照)。ベイルにはそうした身(と心)の弱さや未熟さを克服する教育効果の実例がスウィナトンに適用されるとしたのかもしれない。

OLD は、bonus を‘8 (w. *artes, studia, etc.*) Characteristic of educated or cultured people, liberal, polite’ と定義している。教養科目は、中世以来、文法学校では3科(trivium : 文法、論理学、およびレトリック)、大学ではそれらに4科(quadrivium : 算術、幾何、音楽、天文学)を加え、7自由教養学科とするのが通例である。1535年、国王によりケンブリッジ大学総長に任命されたクロムウェルが大学へ持って来た勅令書には次のような条項がある。

(七) 学芸の学生は論理学、修辞学、算術、地理、音楽、および哲学の基本を教えられ、アリストテレス、アグリコラ、メランヒトンなどの書を読むものとする。スコーツスの書を読んではならない。⁶

スウィナトンは、新旧の時代の大きな転換期の英国にあって、従来の学問(神学と俗学)に熱心かつ優秀だったはずで、中世スコラ哲学の神学者ドゥンス・スコトゥス Duns Scotus (c.1266-1308) も大いに学んで知っていたであろう。そして、メランヒトンの大学の教養科目のカリキュラムは在校生に、弁証法(論理学)、レトリック、および数学の講義を必修とし、キケロの書簡とエラスムスの『ことばと物の豊かさについて』(*De copia verborum ac rerum*) といった書物を推奨し、メランヒトンによるアリストテレスとキケロの講義や、ギリシア語やヘブライ語の時間もあつた (REX, pp. 9-10)。さらに神学部はルターを継承し、当時極めて人気のある、そしてレヴェルの高い所だった。

スウィナトンの肩書は、彼の学歴を知る根拠として曖昧である。前記1の(1)、および(5)のように、サーとしている記録はある。前記1の(8)で、クランマーは彼を文学修士としている。

しかし、前記1の(1)で、リンカーン主教ロングランドは、スウィナトンをサーとしながら、‘And as I thinke, [he] neuer came in vniuersitie.’ と書いている。‘as I thinke’ と断つてはいるが、‘neuer’ という強い否定語に加え、‘vniuersitie’ に冠詞がないことも注目される。ロングランドは、バッキンガム州でのスウィナトンの説教が良民に大きな不満を与え、不快を覚えさせる、その理由は博士たちの学問、知識に欠けるばかりか、思慮分別がなく、生活も最善でないからとし、詳しく彼の言動を説明し、その勅許の取り消しと彼の逮捕を求めている。その中ではスウィナトンの大学歴の否定は有力な根拠になろう。

‘came’ からして、ロングランドは、スウィナトンがウィッテンベルク大学へ留学した事を知らなかったとも考えられる。また、同大学には、当時、改革派の風潮として、大学卒業や学位とそれに付随する称号は好ましがらざる旧教の産物という考えがあつた (REX, p.9)。それゆえ、スウィナトンの学歴については、その多くが依然として不明とせざるをえない。ここでは、ロングランド以外の教区民の遺言状や公記録に見られる役職から判断して、スウィナトンは周囲の人たちから軽蔑されたり、嫌悪されたりするような学問の実践者ではなかつたようだと考える。時代は彼を必要とし、彼はその

時代の要請に積極的に応えた。彼が会衆や読者に期待して止まないことは、学歴の高さではなく、真率な信仰心だった。彼は、次のように書いている。

Every man hath a Testament in his hande, wolde to God in his harte (REX, p.171).

注

1. 写本の表題紙は次の通りである。THE TROPES / AND FIGVRES / OF / *Scripture, a matter desyred of so / muche necessitie, that withoute / it can not easely be avoy- / ded the daunger of he- / resy. Written by / Thomas Swy- / nnerton, / other / wise / Ro- / bertes. / Pro, 15*[:14, quot. in Latin, REX, p.95].
2. 誤植は、‘must writing’(p. 17 [n.37]) や、‘worth nothing [noting]’; ‘it [at] all’(p. 87)、‘(ch.1, p.000, n.000)’ (p.126, n.5) に見られる。リプリント版も同様である。それらの瑕瑾は読者が補正・削除すれば足りるものである。本文で‘Anantopodoton’は目次、および第7章の章題に出てくるが、同章末では‘ANANTAPODOTON’へスペリングが変わる。レックスは序論と脚注で a 綴りで一貫させて説明している。献辞の‘as for good master Moryson’は本文から削除され、脚注へ移されているが、序論でリチャード・モリソンがイタリアから帰国し、トマス・クロムウェルに仕えることになる 1536 年6月をスウィナトンの転義論執筆年代推測 (c.1537-38)の根拠の一つとしている (REX, pp.4, 100 & n.8)。
3. ラテン語の翻訳にあたり、斯界の権威である國原吉之助名古屋大学名誉教授のご教示を仰いだ。学恩に深謝する。もちろん訳文の至らない所は筆者のせいである。一部を改行したりした。
4. Richard Rex, ‘Swynnerton [Swinnerton], Thomas (d.1554)’, ODNB, p.531. 2013 年 10 月 9 日アクセスのオンライン版は、2008 年 1 月作成のもので、2004 年版の‘Sir Thomas More’の後に‘— a claim given at least partial confirmation by Suffolk records which name him as Thomas Roberts.’が足され、‘Holy Trinity’は‘St Mary Elms’へ改められ、‘Suffolk RO, Ipswich’は‘Suffolk RO,’へ、‘PRO,’は‘TNA: PRO,’へそれぞれ一部が削除、補充された (<http://www.oxforddnb.com/view/article/26844>)。
5. マイクロフィルムは、表題紙、および紹介を兼ねた目次1ページと“The prologue of the translatur”のみを再生しており、ベノン (Benno: Bennon) のグレゴリウス7世 (ヒルデブラント) 伝、および神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ4世伝の英訳は現在も未再生である。なお、MSBRの「訳者の序論」の奥付では印刷者はカクストンの印刷で有名なウィンキン・デ・ワード (Wynkyn de Worde [1491-1535]) である。
6. 梅根 悟「第2章 イギリス国教会の教育支配 第1節 ヘンリ八世の宗教改革と教育」67 頁。

参考文献

- Adamson, Sylvia, Gavin Alexander, and Katrin Ettenhuber, eds. *Renaissance Figures of Speech*. Cambridge University Press, 2007.
- Bale, John. *Scriptorum Illustrium Maioris Brytanniae...Catalogus*. 2 vols. Basel, 1557-59. Vol.II, p.76.
- Mack, Peter. *Elizabethan Rhetoric : Theory and Practice*. Cambridge University Press, 2002.
- ODNB : *Oxford Dictionary of National Biography*. Ed. H. C. G. Matthew and Brian Harrison. Oxford University Press, 2004. Vol.53 ; <http://www.oxforddnb.com/view/article/26844>.
- OED : *The Oxford English Dictionary*. 2nd Edn. 20 vols. Prep. J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. Oxford, 1989.
- OLD : *Oxford Latin Dictionary*. Ed. P. G. W. Glare. Oxford, [1982] 2002.
- Rebhorn, Wayne. *Renaissance Debates on Rethoric*. Cornell University Press, 2000.
- REX : Richard Rex, ed. *A Reformation Rhetoric : Thomas Swynnerton's The Tropes and Figures of Scripture*. Renaissance Texts from Manuscript No. 1. R T M Publications, Cambridge, 1999 ; English Renaissance Texts, No.1. Thoemmes Continuum: London•New York, 2004.
- Rex, Richard, 'Swynnerton [Swinnerton], Thomas (d.1554)', ODNB, p.531.
- Swynnerton, John. *A Christian Love-Letter : Sent to a Gentlewoman, Mis-Styled a Catholic, to Labour Her Conversion to the True Catholic Faith of Christ Jesus*. 1606. STC 17-19 LT 23558.
- Swynnerton, Thomas.
- LT : *A litel treatise ageynste the mutteryng of some papistis in corners*. 1534. STC 19177; rev. 23551.5.
- MSBR : *A Mustre of Scismatyke Bysshoppes of Rome*. 1539. STC 23552.
- TFS : *The Tropes and Figures of Scripture*, n.d. REX に拠る。
- STC : *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, and Ireland, and of English Books Printed Abroad, 1475-1640*. Ed. A.W. Pollard and G.R. Redgrave; 2nd Edn. 3 vols. Rev. W. A. Jackson, F. S. Ferguson, and K. F. Pantzer. London, 1976-91.
- Vickers, Brian. *In Defence of Rhetoric*. Oxford, 1988.
- 梅根 悟. 「第2章 イギリス国教会の教育支配 第1節 ヘンリ八世の宗教改革と教育」. 『世界教育史大系 7 イギリス教育史 I』. 梅根 悟監修、世界教育史研究会編. 講談社、1984年.
- 『英米法辞典』. 田中英夫編集代表. 東京大学出版会、[1991;] 2008年.